

● 関 西

嶋 田 邦 雄

「演奏会へおいでるお客さんの耳は確実に肥えている。それに応えられるよう楽団員は厳しい努力を重ねている」と、関西のオーケストラ事務局長は皆、口をそろえたように緊張の面持ちで話す。確かに、現代曲や実験的な曲でプログラムを組んだ演奏会も熱い拍手で包まれている。2017年の2月には大阪フィルハーモニー交響楽団が井上道義の指揮でショスタコヴィチの「交響曲第11番」と「同第12番」を定期演奏会のプログラムに組んだ。特別に謳ってはいなかったが、ロシア革命100年に因んだ意欲的な企画と考えられる。「ロシア革命100年と音楽」に関してはNHK・FMの番組（土曜）で出会う程度だっただけに、「歴史と音楽との関わり」を考えるうえで貴重な試みだった。こんなこともあった。総選挙直前のある日、喫茶店のテレビが近くのターミナルに政権党の総裁が来る場面の中継を映していた。雨の中、傘をさされたヴァイオリニストが「君が代」を演奏していた。近くの客が「気持ち悪い」と呟いた。ふと、音楽、芸術が政治に利用される時代が来ているのではないかと、この疑念がよぎった。嬉しい知らせも。2013年末以来閉鎖されていた大阪の「イシハラホール」が建機・不動産関連の商社「ワキタ」によって再開されたこと。B.タイケンのバロック・フルートリサイタル（11月24日）でオープンした。関西の様々な分野での演奏活動を振り返ってみたい。

オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が尾高忠明をミュージック・アドバイザーに迎え、2018年からは音楽監督としての新しい布陣をスタートさせた。17年はR.シュトラウス「英雄の生涯」（3月）、モーツァルトの最後期の交響曲3曲（11月）だけの出番だったが、「18年から存分に尾高サウンドを」との期待が高まっていた。17年は客演のフェドセーフによるウェーバー「交響曲第1番」やチャイコフスキー「交響曲第5番」（5月）、エリシュカによるドヴォルジャーク「交響曲第6番」などの名演で客席を沸かせた。井上道義が総監督、指揮、演出、字幕訳を担当したバーンスタインのシアターピース「ミサ」も大きな話題を呼んだ。このオーケストラの創立70周年記念公演でもあった。関西フィルハーモニー管弦楽団はデュメイ・藤岡幸夫・飯守泰次郎のトリオで多彩なプログラムを展開。飯守のブルックナー「交響曲第7番」（3月）や藤岡のシベリウス「交響曲第5番」（10月）など定番のシリーズにデュメイのシューベルト「交響曲第5番」（6月）や客演のピエール＝カルロ・オリツィオのプロコフィエフ「交響曲第5番」（2月）などでファンを楽しませた。大阪交響楽団はある意味で今、一番意気に燃えている楽団ともいえる。2010年度からの借入金など累積赤字約1億円を17年3月で完全に返済した。事務局長の給与27%カットや新規楽団員の採用ストップなど血の出る努力を重ねた結果である。2018年4月には念願の公益財団法人化を予定、楽団員の欠員7人の確保や楽団員の給与増にも乗り出す。演奏面ではミュージック・アドバイザー・外山雄三と常任指揮者・寺岡清高、それにユニークな客演指揮陣のコンビで17年は定期演奏会8、いづみホール定期6、名曲コンサート10公演をこなしてきたが、18年度は定期演奏会を11公演に増やす。17年度の客演ではシューベルトとR.シュトラウス曲を組み合わせたG.フェルト

指揮の定期（7月）やヴェルディ「レクイエム」をD.アジマンが指揮した定期（9月）などが注目された。

日本センチュリー交響楽団は飯森範親・首席指揮者と多様な内外の客演指揮者陣で年間8回の定期演奏会、ハイドンを中心としたいづみホールでの「ハイドン・マラソン」、豊中市立文化芸術センターを舞台にした“センチュリー豊中名曲シリーズ”など旺盛な演奏活動を続け、熱いファンを増やしている。D.シトコヴェツキー指揮のシューマン「交響曲第2番」などを演奏した定期（6月）など印象深い演奏会も多い。京都市交響楽団は着実に演奏力量を蓄積、盛況の演奏会風景が名物になっている。ルトスワフスキ「管弦楽のための協奏曲」を出したリープライヒ指揮の定期（4月）やブルックナー「交響曲第5番」を高関健が指揮した定期（5月）など。兵庫芸術文化センター管弦楽団の厚い聴衆の支持も楽団とセットになって広く知られる存在になっている。佐渡裕・音楽監督と豊富な客演指揮者陣でコクのある演奏会を続けている。他の楽団では普通考えられない定期演奏会での“アンコール”も名物。ジョセフ・ウォルフ指揮のエルガー「ヴァイオリン協奏曲」（漆原朝子vn）と「交響曲第1番」を出した定期（4月）、佐渡裕によるメシアン「トゥーランガリラ交響曲」（9月）などが記憶に残る演奏だ。

オペラ上演でも意欲的な演目や演奏、演出が相次いだ。まず、びわ湖ホール。4年がかりで上演する“ニーベルングの指環”シリーズの第1弾として「ラインの黄金」が出された（3月）。沼尻竜典・指揮、ミヒャエル・ハンペ・演出のコンビが内容の濃い舞台を構成。奇を衒わないオーソドックスな展開が戦争や矛盾を生み出す現代社会の苦悩を的確に反映していた。ほかに「ノルマ」や「ミカド」なども。関西二期会はマスカーニ「イリス」（5月）とウェーバー「魔弾の射手」（10月）を上演した。「イリス」ではジャポニズムの奥にある深い社会矛盾をも引き出す演出（井原広樹）が注目されたし、「魔弾の射手」では現代社会に生きる若者の苦悩にも通じるメッセージを重ね合わせていた。関西歌劇団は谷崎潤一郎原作・芝祐久作曲の「白狐の湯」と木下順二原作・大栗裕作曲・武智鉄二源演出の「赤い陣羽織」（9月）。1955年に初演された演目を振り返ってみる試み。関西が熱かった時代を再現しようとの意図も窺える内容だった。注目されるのは大阪音楽大学・ザ・カレッジ・オペラハウスが出したモーツァルト最初期の「偽の女庭師」（11月）。めったに上演されない演目だが、牧村邦彦・指揮、井原広樹・演出のコンビが要領よく纏め上げ、後期の傑作群へとつながる才能の耀きを引き出した。兵庫県立芸術文化センターは「フィガロの結婚」（7月）。映像を多用するこれまでの手法をやめ、演劇的な側面を強調する演出がかえってこのオペラの深さと面白さを強く引き出していた。地域オペラではブッチーニシリーズとして「妖精ヴィッリ」「外套」を出し牧村邦彦・指揮、井原広樹・演出コンビ（10月・みつなかホール）がこでも活躍していた。他に堺市民オペラ「ラ・ボエーム」も。

室内楽演奏グループでは弦や管など様々な組み合わせで珍しい、魅力的な現代曲を披露し続けている「アフター・アワーズ・セッション」が20周年を迎えた。記念演奏（11月）にファンの熱い拍手が送られた。「シリクス・フルトアンサンブル」も粘り強い活躍を続ける一方、老舗の日本テレマン協会や大阪コレギウム・ムジクもバロック曲の発掘や現代曲の紹介を蓄積した力量で続けている。大阪コレギウム・ムジクがC.モンテヴェルディ生誕450年記念を謳って演奏した「聖母マリアの夕べの祈り」全曲公演（12月）はこの楽団の真摯で、豊かな力量を示す内容であった。